

「平和行事参加の旅」

40代 女性

日本人として一度は訪れたい、訪れなければいけないと思っていた広島に今回初めて娘と一緒に訪れることができました。今年は災害レベルの暑さと言われた猛暑の続く中ではありましたが、念願の広島に娘をつれて母娘旅ができ、大変有意義な2日間となりました。

1日目、平和記念公園に行きました。資料館での様々な展示物や被爆伝承者の方の講話を実際にこの目で見たり聴いたりして、原爆の恐ろしさや戦争の悲惨さを痛感しました。現地には世界各国のあらゆる人種や世代の方々が熱心に見学している姿がとても印象的で、私は日本人でありながらこの年になってやっと訪れる事ができたというのに、こんなに多くの海外からの旅行者が限られた日程のなかでこの地を選んで訪れている事に驚きました。唯一の被爆国である日本は、原爆の悲惨さを世界へ発信し続け、後世に伝えていく使命があるのだと改めて強く感じました。

2日目の平和記念式典では、小学生の平和の誓いが大変素晴らしく心に強く響き感銘を受けると同時に自分が恥ずかしくなりました。広島では多くの子供たちが小さなころから平和教育に触れ学び考える機会を多く与えられているからだと思いますが、広島だけでなくもっともっと多くの若い世代に平和教育が広がれば良いと思いました。被爆者の平均年齢が82歳を超え高齢になっている今、私たちそして次の世代に、被爆者の思いや戦争の悲惨さ、そして平和の尊さをしっかりと継承していくことが大切だと思います。

この2日間平和の旅に参加して、娘なりに何か感じてくれたであろう姿を見て、無理にでも娘を誘って本当に良かったです。このような機会を与えてくださった小金井市に深く感謝したいと思うのと同時に、今後も是非多くの方に参加していただき平和について考えるきっかけを作っていただきたいと切に願います。ありがとうございました。

広島原爆ドームを訪れて

10代 女性

これまでも、教科書やニュースでは広島への原爆投下があったということを知っていましたが、今回母のすすめもあり、小金井市主催の「平和事業参加の旅」を通して、初めてその場に訪れることとなりました。

まず、一日目には原爆ドーム、記念資料館へ行きました。その当時の建物がそのまま残っているということ、ここに原爆が落ちたのだということを思うと不思議な感じがしました。資料館には、被爆当時の悲惨さを物語る遺品の数々や写真などが展示されており、原爆の恐ろしさを改めて感じさせるものばかりでした。これらを見て、二度とあってはならないことだと痛感しました。

二日目は、平和記念式典に参加しました。原爆が投下された時間、八時十五分に被爆者の亡くなられた方々へ、黙祷しました。原爆で亡くなられた方々の苦しかった思いに対して、どれだけ辛かっただろうと思いました。

原爆はとても恐ろしいもので、何万人の人を一瞬で殺してしまうという事実は、これからもずっと伝えていかなければならないものだと思います。

ヒロシマ再訪――53年の空白を経て

60代 男性

原爆ドームや元安川の方から吹いてくる涼しげな風が頬をなでる。現在、8月6日午前7時55分。73年前の原爆投下時刻まであと、20分余り。

「とうとう来てしまった。ここに・・・」。時期が時期だけに、感慨も一入(ひとしお)だ。

平和記念公園に設けられた「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式(略称＝平和記念式典)」会場に着席した。テントの幔幕の外にもかかわらず、日差しはさほど強くない。

大きな木立ちで太陽が遮られているからだ。蝉の声も数多く聞こえる。典型的な、日本の夏模様がここにある。連日の炎暑猛暑のせいか、広島は小金井より暑い。式典が終了する午前9時ごろまで、このままの涼しさと日陰が続いてほしい、と祈る。

昭和40年7月26日。今から約53年前。高校2年生の時、修学旅行で広島を訪れた。午後から広島入りし、翌朝早くには次の目的地に向かう強行日程だった。平和公園を訪れ、広島平和記念資料館本館を見学したかどうか。今となっては記憶が定かではない。でも確かに、この地に来ている。

ただ、今回訪問した資料館東館は53年前にはなかった。当時は、本館だけが存在していた。式典前日の8月5日午後、東館で現地関係者に質問して分かったことだ。

修学旅行に参加した高校生達がガリ版(謄写版)印刷で創った、手作りのガイド

ブックが今、手元にある。その小冊子には広島を解説するくだりとして次のような文章が載っている。

「その爆心地が現在の平和公園であり、特に原爆ドームはその当時の恐ろしい様子を見ることが出来る。この平和公園には世界の平和を祈る数々の記念碑がある」。

この文章を読む限り、「核兵器廃絶」「唯一の被爆国」「世界平和の追究」といった強い問題意識は感じられない。この原稿を書いた高校生は、広島から遙か離れた東京に住む、普通のごく平凡な、心優しい青年だったのであろう。

再訪はこの修学旅行以来のことだ。「16歳」の時からことし9月に迎える「古希(満70歳)」まで、思えばほんの一瞬だったような感覚しかない。あっという間に半世紀以上が過ぎてしまった。この間、この国も、この街も、自分自身も大きく変容を遂げている。

平和公園には、多くの記念碑や慰霊碑、それに資料館などがあつた。見学の見玉となった資料館東館(本館は改修中で入館不可)では、国内外からの多くの入館者とともに、貴重な原爆関連資料や展示を見て回つた。ボランティアによる「被爆体験伝承講話」も資料館東館の地下にある会議室で、約1時間にわたって傾聴した。

今回見聞した被爆関連情報は半世紀以上前に広島を訪れた時と比べて、質、量ともに格段の差がある。このような印象を持った。

記念式典には約5万人が参加した。午前8時に始まり、死没者名簿奉納、献花と続き、運命の午前8時15分に全員による黙祷と平和の鐘が鳴らされた。引き続き、平和宣言、小学生による「平和への誓い」、安倍総理、広島県知事、国連事務総長の挨拶があつた。

式典の最後に、出席者全員で合唱した「ひろしま平和の歌」は昭和22年の制作

だが、古さを感じさせない。清らかな楽曲だった。

8時50分ごろから出席者による献花が始まり、小金井からの参加者も全員が献花を済ませた。

1泊2日の「平和行事参加の旅」の全期間を通じて、「戦後の平和な日本の原点がここ、広島にある。それも平和公園にある」と強く感じた。イスラム教徒は一生に一度、聖地メッカの巡礼を目指す、という。この倣いではないが、日本人なら一生に一度は原爆被災地の広島か長崎を訪れ、「これらの地で何が起きたのか」を目の当たりにし、この現実を五感で汲み取ってほしい。

今回の広島再訪で、「もはや戦争は断固として、起こさないと」いう「不戦の誓い」を改めて噛み締めた。余命があと何年あるかわからないが、今後もこの言葉を胸に秘めて暮らしていこう。私の真夏の「鎮魂の旅」はこれで終わった。でもまた、始まるかもしれない。

「平和行事参加の旅」に参加して

60代 女性

8月5日、小金井市役所の広報秘書課広聴係の企画である「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式、平和行事参加の旅」に参加するため、朝、6時15分に武蔵小金井駅に集合した。新幹線に乗り、午後12時半ごろに広島駅に着いた。その日は平和記念資料館や原爆ドームなどを見学し、次の日、朝早く慰霊式の式場へ向かった。帰りは、14時15分の新幹線に乗った。

今回、私は暑さに弱く、最初は参加する気はなかったが、夫に言われてなんとか参加することにした。広島は本当に暑く、駅に降りた途端くらくらしてしまっただ。アークホテルは駅から近かったようだが、ポーっと最後からみんなについていった。市の職員の方々も気を使ってくださり、ゆっくり歩いてくださったようだったが、私は参加しなければよかったと思った。

しかし、広島に来てしまったからには、何とかしないといけないと思い、思い切って職員の畑野さんと後藤さんに、私一人だけ後から行くから、集まる場所は平和記念資料館にしてもらえないかをお願いした。畑野さんと後藤さんは快く承諾してくださり、私は一人ホテルに残って、休んでいた。そして、1時過ぎにタクシーを使って平和記念資料館にまでたどり着いた。休んだこともあって、私の体の調子もよくなり、暑さに対しても少し慣れてきた様であった。

4時15分から、原爆体験者の話を伝える会に全員で参加した。実際に話を聞くのは、経験者ではないにしても、話が非常にうまく、感動した。DVDも流したので、余計、身近に感じた。私は、初めて広島に来たが、やはり来てみてよかつ

たと思った。一度は来なければいけないと思っていたが、このような機会がなければ来ることができず、本当に良かったと思う。

帰りも私は一人でタクシーを使い、途中で原爆ドームを見た。このようなものが戦後70年経っても残っていることに、今更ながら驚いた。そして当時の原爆がいかにかいほいものであったかを、改めて思った。

次の日、原爆死没者慰霊式及び平和祈念式が朝8時から行われ、広島市議会議長、広島市長の平和宣言が行われた。広島市長は、ICANのノーベル賞受賞や、核兵器禁止条約の批准に日本が加わっていないことなどを挙げられ、唯一の被爆国である日本の政治的行動が世界全体の非核に対応していないことを指していると思われた。私は、小金井市が非核平和都市宣言を行っていることを考え、改めて平和について考え、行動していかなければならないと思った。最後に「ひろしま平和の歌」を全員で歌ったが、70年前に作られた歌とは思えない、素晴らしい歌であった。

今回、暑さに弱い私ではあったが、一人の行動を許していただいたことによって、体調がそれほど悪くならず、この旅に参加して非常に有意義に感じた。参加していた皆さんや企画していただいた小金井市役所の方々に心からの感謝を申し上げたい。

語り継ぐことの大切さ

40代 女性

今回、「平和行事参加の旅」に親子2人で参加させていただいた。息子はまだ小学4年生だが、戦争、2度にわたる原爆投下という日本が辿った歴史に目を向ける契機になればと考え、応募した。

息子には旅にあたり、自分で見聞きしたことを素直に受け止めてもらいたかったのであえて予備知識を与えなかったが、案の定、広島平和記念資料館では見るものすべてが衝撃的だったようだ。きっと息子には遠い昔に起きた異国の地での出来事のように感じられたことだろう。

しかし、見学後に伺った被爆体験伝承者の講話で、息子の表情は一変した。自分と大して歳が変わらない勤労学生の、想像を絶する被爆体験、その後の壮絶な療養生活、そして友人の死。息を飲み、自分の身と置き換えながらのめり込むように話を聞いていた。2日目の平和祈念式典では暑さも忘れて式の様子に見入っていた。73年前、広島で何が起こったのか一生懸命理解しようとしているように見えた。

帰京後は折に触れて戦争の話題を口にし、本を探したり調べるようになった。

私の両親は戦争を知らない。しかし、祖父母は戦争がどのようなものだったのか身を持って経験している。子どもの頃、私は時々祖母から戦時中の話を聞いた。特に祖母は当時救護班（隣近所で負傷した人を看護師に代わって手当てする）だったこともあり、被弾した人の様子などをポツリポツリと教えてくれた。あまりに残酷で時には耳を塞ぎたく事もあったが、「日本が昔どんなに大変だったかを

知っておかなければ」と言っていた。ところが祖父からは戦争について一切聞いたことがない。

鉄道会社に勤務する祖父は、徴兵ののち戦地に赴くために兵士達と共に列車に乗り日本各地を渡り歩いたのだそうだ。これは母から聞いた。常に死と隣り合わせの日々。爆撃を受け、九死に一生を得たことも一度や二度ではなかったに違いない。

終戦間近の頃、祖父は広島に駐屯地にいた。ところが、軍の命令で祖父は原爆投下直前の8月1日に広島を離れたのだそうだ。原爆投下直後、共に行動してきた仲間を思い、終戦後すぐに広島に戻ったが、広島に到着した時の惨状にぼう然と立ちつくすしかなかったそうだ。運命の分かれ道。助かった安ど感とひとり生き残った申し訳なさ、やるせなさで複雑な心境だったろう。祖父にとって戦争は決して過去の話ではなく、思い出すのも辛いことだったのかもしれない。

結局、私は祖父から1度も戦争の話聞くことなく、祖父は亡くなってしまった。

祖父の死後、母はもっと祖父の話聞いておきたかったと後悔していた。今はその時の母の気持ちがわかる。資料館で講話を拝聴し、戦争や原爆がもたらしたおぞましきや悲惨な光景を想像させ、私達を突き動かすほどの迫力を持つものは生の体験談よりほかにないと感じたからだ。体験を語ることは過去の自分と向き合うことでもあり、それがとても辛いことだということは祖父が話さなかったことからよくわかる。私達は、それでも語ろうと勇気を出してくださった方々に敬意を表し、耳を傾け、それを子ども達にも語り継いでいく必要があると強く感じた。

戦争を知る機会がどんどん失われつつある今、過去を見つめ、親子で話し合うきっかけを作ってくれた今回の旅に感謝する。

広島の旅

9歳 男性

ぼくは、この夏休みに広島平和の旅に参加しました。広島には前から行きたいと思っていました。なぜなら、去年学校の先生が夏休みに平和記念式典に参加して色々教えてくれたからです。原爆の事は、お母さんに少しだけ聞いて知っていたけど、どんな爆弾だったのか、全然知りませんでした。

だから、旅の1日目に、資料館に見学に行ったときに色々分かってとてもビックリしたし、広島赤十字病院の治りょうとか、証言がこわくて最後まで見れませんでした。たった一発の爆弾で14万人も人が亡くなったなんて想像できません。そんなにすごい被害だったのに、爆弾の名前が「リトルボーイ」で、とても不思議です。

被爆体験伝承者のはま田千恵先生のお話は、原爆がどんなにこわいかがよく分かって、被爆者は今でもケロイドのあとを気にしていると教えてくれてすごかったです。火傷をした人間は水を飲んだら死んでしまうと言ってビックリしました。水をくださいと言って死んだ人やたて物の下じきで生きたまま焼け死んだ人を考えると、こわくてその時は考えるのをやめてしまいました。原爆ドームは昔のままのこっていてビックリしました。原爆投下の目印だった相生橋も見ました。

旅の2日目は、いよいよ平和記念式典です。すごく暑かったけど、小学生の代表が平和へのちかいを言っていたのがすごい内ようで、ビックリしました。

けん花して、爆心地にも行って、お祈りして、次に広島城へ行きました。ボランティアのおじさんたちが被爆じゅ木のクロガネモチのことを教えてくれました。

爆風が当たった側は根っこがなかなかのびないと聞いてビックリしました。広島城も爆心地から近くて爆風で全かいしたと説明に書いてありました。

東京に帰ってから、戦争の事を調べたくなって昭和館とかしょうけい館に行つて、本も見ました。原爆の被害の事がよく分かって、多分、広島に行つてなかったら原爆のこともあまり知らないままだったし、戦争中の生活がどんな感じかも分からなかったと思いました。でも、いろいろ調べて戦争や原爆のことは分かったけど、なぜ日本が戦争したかは、ぼくにはよくわかりません。薩長同盟みたいに別の国と仲良くなれるようにできたらいいのにと思いました。

今回の広島での平和の旅は、とても良かったし、勉強になりました。また行きたいです。

小金井市「平和行事」に参加して

40代 女性

例年になく猛暑のなか、小金井市の平和行事に参加し、広島市の原爆投下に関わる関連施設を見て回りました。広島平和記念資料館にある被爆資料には、子どもと共に、子どもの父（母）や、子どもの兄弟（姉妹）を見送る父や母、あるいは夫や妻の思いが、ひとつひとつ残っており、被爆された方の悲痛な思いが伝わってきて、涙がこぼれました。

当時、子どもだった被爆者も高齢となり、その平均年齢は八十歳を超えたと聞きます。広島平和記念式典の前日、広島平和記念資料館のメモリアルホールで開かれていた、伝承者による被爆体験講話を拝聴しました。体験者の思いが伝わる大変、心がこもった語り部でした。

広島市には「被爆体験伝承者養成事業」というものがあり、『被爆体験証言の被爆体験や平和への思いを受け継ぎ、それを伝える「被爆体験伝承者」』を養成していることを、後から知りました。

戦後七十三年が経過し、被爆体験を受け継ぐ時間も残り少なくなってきました。広島市の小学校六年生が子どもを代表して広島平和記念式典で、被爆者の体験や思いを伝える伝承者になると言ってくれました。核兵器がもたらした人々の苦しみや、時代と共に風化していかないよう、子々孫々に伝承し続けられることを願ってやみません。

私自身も祖父母や両親から聞いた戦争体験談を子供たちに話していこうと思います。広島市が発信する平和への願いを、小金井市の「平和行事参加」を通してキャッチできたことは、自分にとって有意義なことでありました。